駅まち叙景

Vol.5 ― 芦別

星々が生まれ、輝くまち。

芦別駅（ＪＲ根室本線）

芦別市本町1018番地2
大正2年、旧釧路本線の滝川・下富良野（現在の富良野）間開通に伴い下芦別駅として開業。昭和21年、芦別駅と改称された。

空知地方中部に位置する芦別市は、全国でも有数の面積を誇る。森林が市域の約九割を占め、古くから林業や木材製造業がさかんだった。内陸の盆地という立地条件から周囲のまちの明かりが遮断されるため、星空の美しさは格別だ。昭和六十三年、当時の環境庁から「星空の街」に認定された。

明治二十六年、歌志内からの入植者により芦別の開拓が始まった。以降、石川、富山、京都などからの入植が相次ぎ、芦別は、農業と林業を主要産業とする村へと発展。同三十三年、歌志内村から独立し芦別村が誕生した。

大正初期に鉄道や電力などのインフラの整備が進められ、同時期に三菱合資会社が上芦別で採炭を開始。炭鉱のまちとしての開発が本格化した。戦後の復興と高度経済成長を背景に石炭の需要はピークを迎える。しかし昭和三十年代半ばから、石油へのエネルギー転換により炭鉱は急速に斜陽化。平成四年、芦別の坑内掘り炭鉱はその歴史に幕を下ろした。

旧三井芦別鉄道炭山川橋梁／芦別市西芦別町・中の丘町
炭山川にかかる芦別を代表する炭鉱遺産。橋梁の全長は約94メートル。最高約30メートルの鉄筋コンクリート製の橋脚に支えられている。

芦別はかつて、「芦別五山」と呼ばれる大手五大炭鉱がひしめく炭鉱のまちだった。最盛期には約七万五千人が暮らした。そんな熱い時代を支えた鉄橋が、今も市内を流れる炭山川に残されている。

駅から国道４５２号を夕張方面へ車で約八分。深緑の山々を背に機関車が鉄橋を渡ろうとするかのような光景が現れる。旧三井芦別鉄道炭山川橋梁は、三井芦別炭鉱からの石炭運搬のために昭和二十年に竣工し、平成元年まで活躍した。平成二十一年には国の登録有形文化財に、令和元年には文化庁が選定する日本遺産「炭鉄港」の構成文化財に認定された。渓谷に静かに佇む鉄橋は、戦後の経済復興を支えた炭鉱のまちのストーリーを次代へ伝えている。

ディーゼル機関車DD501と、石炭専用貨車セキ3820が橋上に展示保存されている。ノスタルジックな光景が活気に沸いた炭鉱の時代を彷彿とさせる。

本社工場では、国産の広葉樹を100%使用（うち北海道産は90%以上）している。

年輪を重ねながら、ものづくりの旅は続く。

芦別の小さな合板メーカーが開発した新素材「ペーパーウッド」が、「グッドデザイン賞」をはじめ国内外で多数の賞を受賞。その美しさと独創性は、世界で認められている。野花南町にある滝澤ベニヤ株式会社を訪ねた。

「父が、森林資源が豊富な芦別に拠点を定め、昭和十一年に単板工場を創業したのが弊社の始まりです」取締役会長の瀧澤量久さんは語る。多くの合板メーカーが輸入単板を貼り合わせ合板を製造する中、滝澤ベニヤでは丸太の仕入れから単板・合板の製造までを一貫して行う。この技術的素地があったからこそ「ペーパーウッド」は完成した。単板にカラー再生紙を挟んだ新発想の合板は、量久さんの次男で現・代表取締役の瀧澤貴弘さんがデザイナーと共同開発した。ストライプの断面が特徴で、企業のロゴカラーなどオーダーメイドにも対応。高い技術と木の目効き、機動力が持ち味の滝澤ベニヤは「多品種・少量生産」を掲げている。

取締役会長 瀧澤量久さん

「ロータリーレース」と呼ばれる機械を使い、丸太をかつら剥きのように薄く剥いて合板の材料となる単板を製造。この工程を見学できる工場は国内では数少ない。

「むかし、同業者はライバルでしたが、今は各々が得意分野を持って輪になってやっている。息子もそうですが、コミュニケーションが要のようです」と量久さん。コンテナ船での長時間輸送が難しい「ペーパーウッド」は、製品化して欧米へ輸出している。しかし、多くの事業者との交流から台湾とのつながりができ、距離が近いアジア圏での販路が見えてきたという。

道産材へのこだわりは創業から変わらない。地域の森を育むために、地域の木を使う。北海道には多様な広葉樹が混在する。まとまった量の確保が難しいからこそ、それぞれの個性を活かすための研究開発にも余念がない。

社是「成業則正道」について、「若かった頃、『成業』とは『栄える』ことだと考えていましたが、今は『続ける』ことだと解釈しています」と量久さん。経営のバトンは、平成二十六年に貴弘さんへと託された。親子三代で受け継ぐ、たゆみない努力と社是の精神が、唯一無二のプロダクトを生み出していく。

Paper-Wood（ペーパーウッド）で作る
木工製品のファクトリーブランド「PLYWOOD laboratory」は、
ニューヨーク近代美術館（MoMA）のミュージアムショップでも販売されている。

HP https://www.plywoodlaboratory.jp/

芦別市旭町油谷11　TEL 070・3866・2742　HP https://glampicks.jp/glamping/g23592/official/　休業 10月下旬～4月下旬　定休日 不定休

1泊2食付きで最低宿泊料金11,100円／人～ というリーズナブルな料金と、「手ぶら」で楽しめるスタイルで、気軽に楽しめるグランピングを提案している。

「童話の森」で、満天の星を浴びる。

「童話の森」を施設コンセプトに、北欧風のインテリアを採用。

快適に過ごせるようアメニティも充実。ポータブルバッテリー、サーキュレーター、防虫ディフューザー、室内プラネタリウムなどを完備している。

木々の葉擦れに耳をすます。心地よく揺らぐ焚き火をみつめる。無重力チェアに全身をあずけ、天空を仰ぐ。市街地から車で約二十分。豊かな森林の中に広がるザランタン芦別では、大自然を五感で味わう極上の体験が待っている。

「ザランタン」は株式会社ダイブが運営するグランピング施設で、地方の遊休地をリデザインし新たな魅力を発信。令和三年にオープンしたザランタン芦別の魅力について、同社の安藤征太朗（あんどうせいたろう）さんは語る。「都市からのアクセスの良さと、やはり星空。これに尽きるのではないでしょうか。とくに真夏は、壮大な天の川銀河が圧巻です」。

ロケーションを活かした多彩なアクティビティも大きな魅力だ。天窓付きのサウナとワイン樽の水風呂でととのう「テントサウナ」、「手作り窯焼きピザ」、薪割（まきわ）り、焚き火、昆虫採集、野菜の収穫も体験できる。フィンランド発の投てき競技「モルック」やバドミントン、サッカーボール、グローブ、ハンモックなど遊具も豊富に用意されている。

手ぶらで楽しめるバーベキューも宿泊体験のハイライトだ。テントに隣接する専用デッキで地元産の旬の恵みを堪能できる。食事は宿泊とセットになっているが、食材の持ち込みは自由。また、近接する「おふろCafe星遊館」で、大浴場や露天風呂、約一万冊の雑誌や漫画を揃えるフリースペースを利用できる。キッチンカーのカフェ&バーではソフトドリンクやクラフトビール、ワインなどアルコールの提供も。敷地の奥には明かりを最小限にした「星空ラウンジ」があり、ラグを敷いたソファのあるスペースで、夜の静寂（しじま）と星空に浸ることができる。

「北海道の恵みたっぷりBBQ」2,200円／人

北海道産「もち豚」のロース肉をはじめ、上富良野のオニオンソーセージ、芦別産の季節の野菜、留萌産の帆立などの海鮮も。ライスとパン、海老のアヒージョ、ポタージュもセット。

※メニューは一例です。

「一生モノの『あの日』をおとどけすることが私たちのミッション。お客様の記憶に残る『輝く日』のために、様々な楽しみ方をご提案しています」と安藤さん。夏休みが終わってもハイシーズンは続く。上金剛山（かみこんごうざん）展望台から眺める雲海（うんかい）は、爽秋の大気が盆地を包む九月からが見頃という。

ベルテントの宿泊は2～6名様まで。人数や目的に合わせ様々なプランやオプションを用意。テント同士の間隔も十分に保たれており、森に囲まれたプライベートな空間を楽しめる。

記事の内容は取材日（2025年6月19日）時点のものです。予告なく営業時間の変更や休業などの場合があります。ご利用の際は予めご確認ください。表記の金額は全て税込みです。